

ふくいミュージアム

1990.3.20

No.17

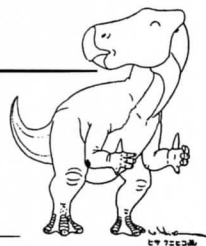
福井県立博物館



明治・大正期のマッチラベル (P 5 参照)

春の特別展

恐竜時代 — 日本と中国 —



主催：福井県立博物館、中日新聞・北陸中日新聞、NHK福井放送局 特別後援：中国科学院

恐竜は、今から約2億年前に地球上に現れ、6500年前に絶滅したといわれています。その間、彼らは実にうまく環境に適応し、そして多様に進化し、子孫を残していきました。

現在、彼らの姿や鳴き声を直接見たり聞いたりできません。しかし、彼らの体のつくりや生態などは、地層の中に眠っている恐竜の化石を発掘し、その骨格の化石から復元したり推定したりすることができます。このような恐竜に関する研究は外国ではさかに行われてきました。そして、これらの豊富な研究成果の情報はこれまで日本にも紹介されてきたのです。

このような状況の中で、残念ながら10年程前までは日本から恐竜が発見されず、“輸入された外国製”の恐竜で学んできたわけです。しかし、ここ数年、日本からも相次いで恐竜の化石が発見できるようになってきました。とくに、北陸の白山山麓に分布する「手取層群」からの恐竜化石発見には目をみはるものがあります。

現在では、日本から発見された恐竜の種類だけを見ると、外国にひけをとらようになってきました。そこで、今回、この特別展では、日本の恐竜の現状をまとめ、さらに恐竜時代地続きだった中国の恐竜を展示し、恐竜時代の日本の様子を復元してみたいと考えています。

会期：平成2年4月13日(金)～6月3日(日)

会場：福井県立博物館特別展示室

入館料：大人700円、大高生500円、小中生300円

☆団体はそれぞれ2割引きとなります

★この特別展は次のように巡回します

7・8月 名古屋会場 (名古屋市科学館)

9月 浜松会場 (浜松市科学館)

10月 東京会場 (会場未定)

展示構成と主な展示標本

I、恐竜とは？

恐竜の進化、食生活、繁殖などをパネルで解説します。

II、恐竜時代の海と空は？

陸に恐竜が生活していたとき、海では頸長竜やアンモナイトが活動し、空には翼竜や鳥類が飛び回っていました。

・フタバスズキリュウ産状模型

・ズンガリプテリス (中国産翼竜頭骨実物)

III、日本の恐竜は？

これまで日本から発見されている恐竜の化石を展示します。

・フクイリュウ (福井県産)

・カツヤマリュウ (福井県産)

・スギヤマリュウ (福井県産)

・カガリュウ (石川県産)

・ハクサンリュウ (石川県産)

・シラミネリュウ (石川県産)

IV、手取湖の森林は？ — 恐竜の生活環境 —

手取層群に焦点をあて、恐竜をとりまく植物や動物を展示し、古環境の復元をします。

・石川県白峰村産植物化石

・テドリワニ

・カメ、魚類

・恐竜復元模型

V、中国の恐竜は？

・クミンゴサウルス全身骨格実物 (全長約10m)

・ベルサウルス全身骨格実物 (全長約6m)

・チンタオサウルス頭骨実物

・ヤンチュアノサウルス頭骨実物

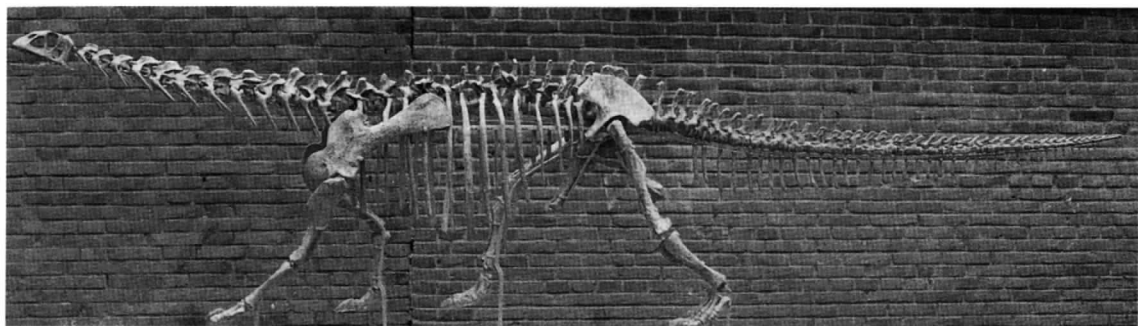
・恐竜の卵や足跡化石

・ワニ・カメ

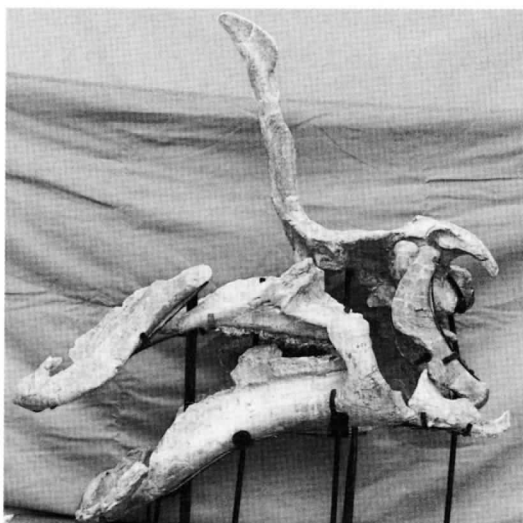
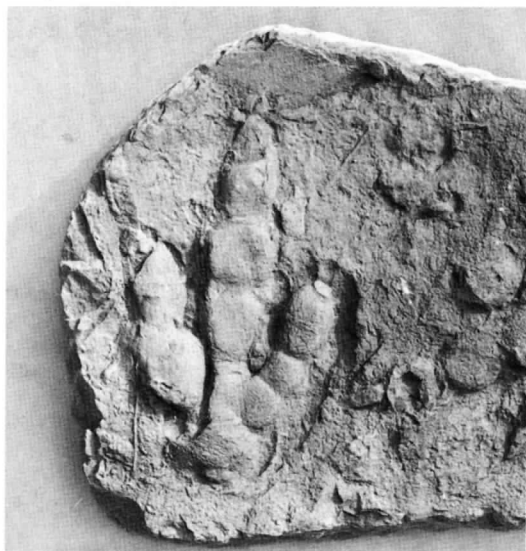
《上記約70点の標本が中国からやってきます》

VI、映像展示

NHK製作 (新作) のビデオを常時上映します。



ペルサウルス全身骨格（竜脚類）



（左）恐竜足跡化石（右）チンタオサウルス（鳥脚類） 写真提供：中国科学院

秋の特別展

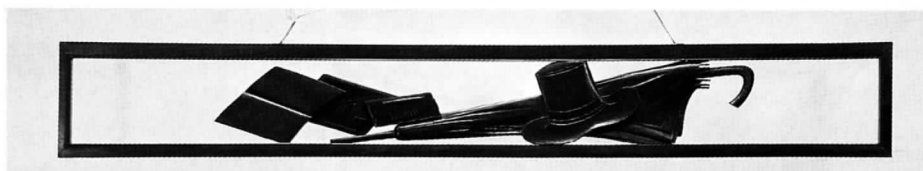
福井県の誕生 — 明治の「ふくい」 — 9月28日(金)→11月4日(日)

秋の特別展は、明治14(1881)年 2月 7日の福井県の誕生を中心に、明治前期の「ふくい」にスポットをあてます。

近代化の波が押しよせる激動の時代、地域社会はどのように変貌し、人びとは何を求めたのでしょうか。「文明開化」が映しだした光と影を紹介します。

【展示コーナー(予定)】

- めまぐるしい県域の変遷
- 地租改正と自由民権運動
- 大区小区と町村
- 小学校の開設
- 庄屋から戸長役場へ
- 交通・通信の発達
- 新しい町村の発足
- 近代産業のめばえ
- 民衆の不安・騒動
- 文明開化の光景



「開化欄間」：シルクハット・洋傘・洋書・ペンなど、文明開化の風潮を代表する物品が彫られています。

研究ノート

テゾリの利用の事例と展望

テゾリは岐阜県飛騨地方の西部、美濃地方北部、福井県北部、石川県などによく見られる。滑走板が1枚だけで、左右に荷台と操作のためにテがつく。福井県の東北部に導入されたのが明治の末ごろしく、飛騨地方でも大正から昭和初期ごろである。

使用法も在来のそりと異なる。滑走板を2枚もつ形のそりは横木の上に荷をしばりつけ、進行方向へ引いて動かす。左右のバランスはあまり注意なくとも良い。テゾリは荷のほとんどが木材や薪で、普通、荷を縛らない。左右のバランスをとることが主な操作で、進行方向に大きな力をかけない。滑走板の前後の端に反り返りがあり、進行方向をかえながらジグザグに下りることのできる急斜面でも使える。しかし平地での使用にはむいていない。

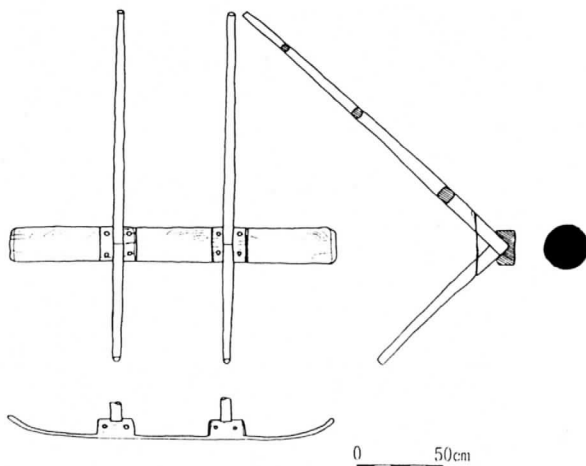
テゾリは在来のそりと異なりかなり広域の分布が見られるが、土地ごとの受容のしかたはまだ十分に報告されていない。これはテゾリの特徴を大きく物語るとともに、地域性と民具の係わりをを示す材料でもある。そこで勝山市北谷町河合の事例を報告し、今後の研究の展望を述べたい。

I

勝山市北谷町河合の山岸甚五郎氏は明治42年の生まれ。徴兵から帰って2年ほどしてから、同じむらの斎藤ムツエモンという17・8歳年上の人に「弟子入り」して操作の方法を習った。この頃は河合ではテゾリを使う人は少なく、山岸氏が習い初めたのもごく早いほうであったという。その後テゾリを使う人が増えたが、山岸氏は伐採や木材の搬出に従事することが多く、テゾリの使用や、製作についてもたいへん詳しい。

テゾリの滑走板はハンサの木が最も適している。朴やケヤキ、ミズキでも作ることができたが、これらは板が弱く滑りも悪い。だから売ることができないのはすべてハンサであった。河合にはこの木がないため主に小原（勝山市北谷町）で作ってもらった。滑走板は長さ6尺2寸、幅7寸5分が標準であった。山岸氏は大野市の打波でハンサの木をもらい自分で

作ったことがあったが、それでも仕上げのかながけは大工に依頼した。滑走面の仕上げはたいへん難しかったのである。テはナラの木で作られ、ナガテは通常7尺2寸、ムカイデは3尺5寸から4尺にした。手の間隔は2尺4寸ほどである。



テゾリ（大野市上打波・標準よりやや小型のものをいう）

滑走板の縦断面は中心が上にそるものがよいという。山岸氏が白峰へ木材の搬出にでかけたことがあった。ここはテゾリの発祥地と目される新保に近いが、白峰の人よりも河合の人の方が操作がうまかった。これは白峰ではタイコゾリといい、滑走板が滑走面の方にふくらんでいて、雪が少しでも突出していると滑らなくなるのに対して、河合のそりは逆方向にふくらんでいたためという。その原理がわかると白峰の人はマクラの間に梁を入れて下ふくらみにして、かなり能率が上がった。ただしこれは滑走板に水を含ませなければならず、そりが重くなるからタイコゾリは決して望ましいものではないという。

テゾリはそりと荷の重さで滑るものであるため、わずか5分程ミチの雪が盛り上がっているだけでも動かなくなってしまうからミチツケが難しい。手慣れた人なら山の斜面を見渡して的確にミチをつけるべき所を指示できるが初心者にはこれがまずできない。6尺～9尺のミジカモンを搬出する場合はミチ作りも簡単であるが、8、9間もある長尺物だと素人にはほとんどできないという。また初心者がそり

を操作すると滑走板の縁でミチをこわしてしまうから、スコップで修理をしなければならなかった。夕方にミチが悪くなると朝方凍ってしまい、翌日の作業に差し支える。そこで1日の搬出作業の最後に上手な人が通常の搬出量のおよそ半分の100貫弱の荷をつけて「ミチの掃除」をしたものという。

河合にはテゾリの一種のセンザシ（栓ざし）と呼ぶものがある。テゾリは滑走板のマクラにテを縄や針金でしばりつけるが、センザシはマクラの側面に穴をあけ、こめせんで腕を固定する。テゾリを背負い上げるとき、普通のものだとテが木につかえたりしてやっかいである。ところがこのそりはせんを抜けばテが容易にとりはずせるから、木の多いところで便利であった。また夜間に滑走板の裏に雪がつかないように分解して覆いをかけておくこともできた。この種の工夫は他の場所ではまだ聞いておらず、珍しいものといえよう。

河合では燃料のホエを運ぶ際にハシゴゾリもよく使われた。これは比較的幅が狭く、かつ丈の高い滑走板2枚を栈で固定したそりである。ただ、テゾリが普及すると、あまり使われなくなったようである。

II

テゾリの導入の契機については飛騨では外部から木材搬出業者が持ち込んだというし、大野郡和泉村荷暮では第2次大戦前後に飛騨の山林業者が伝えたという。福井県内ではテゾリをウシクビとか、シンボゾリとも呼ぶように、その伝播の中心は石川県の白山麓にあったものと推定される。河合のようなごく近接している所ではそこへかけて習うこともできたであろう。テゾリは従来のそりと異なった操作をするため、関連の技術を含めて相当の習熟を必要とした。もっとも専門的に使用するのではなく、「使い方を見ていて覚えた」でもよかった。ただ導入初期には老人はほとんど使おうとせず、若い者だけが習ったというような話がある。これは単に体力だけの問題ではなく、新しい技術への適応の問題でもあろう。また大野市の森山や美山町の河内のように一般の人は在来のそりで薪などを運び、テゾリは業者だけが使ったというところもある。

製作をよく慣れた大工に依頼するというのもこのそりならではの特色に数えることができる。山岸氏も仕上げだけは専門の大工に依頼したのであるし、

大野では150を越えるテゾリを作って売った人があつた。これは材料の制約もあるが、業者が効率よく使用するために必要だったと考えられる。わずかな物の運搬ならテゾリでも多少の滑りの悪さは問題にはならないし、在来のそりではさらに問題が少ない。テゾリの滑走板が長さ6尺程度、幅7寸程度とほぼ一定しているのは、人間の体に合わせたともいえるが、また同時に製作に専門の大工が関与したことが影響しているだろう。

業者の使用、一定の形と大きさの特色にもかかわらず、詳細にみると土地により独特の変形、改良が行われている。まず石川県にはテが左右とも同じ長さのものがあつた、しかも左右のテを木の股で作ったものさへある。これは改良というよりも改良前の形が残ったものかもしれない。また滑走板が5尺ほどの小型のものが岐阜県の明方村のコレクションにあり、池田町では逆に滑走板が長さ220cm、幅30cmと大きいものがあつた。これはテの間隔が1mもありテゾリ特有の操作ができない。滑走板の先端に縄を通したと見られる穴があるので、平地で数人がかりで使用したものであろう。病人を運ぶために腕をつけかえて戸板のをせ、大勢で引いたという話は奥地の村ではときどき聞く。河合のセンザシも独自の改良の一例といえることができる。

III

テゾリの伝播には専門的な山林業者が大きく関わった。従ってその伝播には山林業者が移動するような大規模な伐採や、搬出が必要だったと考えられ、テゾリは近代が生んだ民具ということもできよう。この点を明らかにするにはテゾリの発生について知る必要があるが、まだ確定的なことは言えない。またテゾリを受容した人すべてが業者とは限らないし、テゾリを知っていてもほとんど受容しなかった所もあり、独自の改良を加えた所もある。こうした人びとはなぜそうしたか明らかにすることにより、テゾリの性格をより明瞭にできると思われる。

参考文献 橘礼吉 「白山麓白峰村のテゾリ」『雪と生活』第4号など

(坂本 育男)

資料紹介

ガラス灯

— あかりの文明開化 —

ガラス灯は、一見したところ、横浜や東京で点灯されたガス灯に似ていますが、じつは中に石油ランプを用いた照明灯です*。まだガス事業が始まらない地方の町で、明治10(1877)年ころから、これを街灯や旅館・商家などの案内灯に用いることが流行しました。早い例では、明治5年に京都府、翌6年に三重の四日市で、街灯にガラス灯を取り付けたことが確認できます(『明治事物起源』)。

このことは、外国からの石油の輸入がさかんになってランプが普及したこと、つまり、“あかり”の開化が地方の町ではじまったことを物語っています。当時、人びとが街灯のガラス灯を誤って「ガス灯」と呼んだという記録があります。しかしこれも、「ガス灯」が人びとの間で、あかりの開化を象徴する流行語になっていたことに原因するのでしょうか。

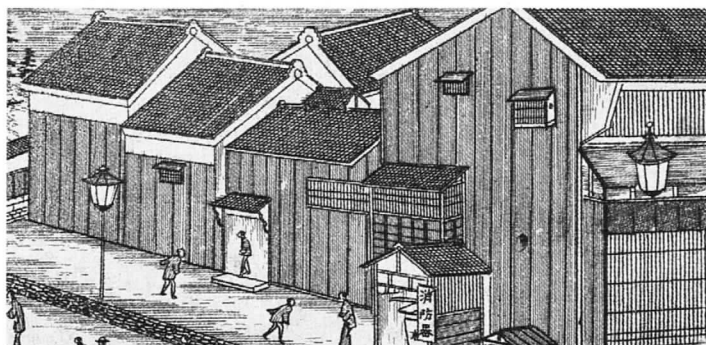
福井でも、いつが最初なのかは不明ですが、明治20年に発行された「福井県下商工便覧」には、多く

のガラス灯が描かれ、かなり普及していたようすがわかります。さらに、絵はがきや写真帳などをみていくと、明治の末ころには、「ガラス灯のない旅館や商家はない」といえるほどです。そして、大正に入って電灯が普及しはじめると、しだいに姿を消したようです。

なお、初期のガラス灯は、六角形で透明なガラスを用いていますが、後には四角形で摺りガラスを用いたものが増えていったようです。

* なかには、ロウソクを用いたものもあります。

(笠松)



明治20年『福井県下商工便覧』より(福井元呉服町)



初期のガラス灯

——<表紙説明>——

マッチラベル

明治・大正初期の国内向け(上)と輸出向け(下)のマッチのラベルです。明治の半ばから大正期にかけて、わが国のマッチは、中国やインドなどのアジアから、遠くアフリカ・南米にまで輸出されました。

マッチの製造は明治10年代からさかんになります。国内向けのマッチをよく見ると、「神仏適用製」「神仏灯火用 清浄請負」などの文句が書かれてい

ることに気がきます。これは当初、老人などの間に「マッチは、けがらわしいもの」という風評が立ち、業界がこれに対処した結果といえます。マッチも、神仏をまつような場では、容易に受け入れられなかったことがわかります。

福井で製造・使用されたと思われるものが、右上の2枚です。

(笠松)

入館者の声

2月7日のふるさとの日から 3月18日まで、「館蔵品」展を開催しました。これは、昭和62年度以降に収集した資料の中から、「江戸時代の赤瓦と越前焼」「近代マスメディアの歴史」「近世・近代の絵図地図」「さしことさっくり」「若狭塗」などのテーマを構成し、展示したものです。期間中、たくさんの観覧者があり、展示の感想についてアンケートを実施したところ、次のような声がありましたので紹介します。

○近所の寺にもこんな瓦があったなあ。説明文を読んで、赤瓦に興味を覚えました。これからは、たぶん瓦に目がいくと思います。

○新聞や雑誌など、とてもなつかしい思いがしました。自分が若いときに読んだ雑誌は、表紙ばかりで

なく、中もみたいと思います。

○ラッパのついた蓄音機で、音楽を聞いてみたい気がしました。

○江戸・福井往還図屏風は、福井までの街道の宿がくわしく描かれていて、興味深かった。

○江戸時代初期の日本図は、現在のものと較べると変形しているのがおもしろかった。

○さっくりがなつかしい。今度は「夜着」も集めて展示してほしい。

○全体的に資料の説明を、写真や図を使ってもっとわかりやすくしてほしい。

○展示品の種類と点数を増やしてほしい。

○もっと宣伝をして、みんなにみてもらおうとよい。

○展示室内が静かすぎるので、音楽を流すとよい。

ビデオライブラリーから

若狭のみほとけ

福井県の南部・若狭地方は古くから中央とのつながりがつよかった地域で、そのため、優れた仏教彫刻が数多く残っています。この番組ではそれらのうち、重要文化財に指定されているものを中心にして白鳳時代から鎌倉時代までの遺品17体を紹介しています。

若狭地方で最も古い遺品は小浜市・正林庵の銅造菩薩半跏像です。白鳳時代の作といわれます。ついで奈良時代の末の作とされるのが小浜市・多田寺の木造薬師如来像です。またこの像は個性的な作風をしめすことでも知られています。平安時代に入るとこの地方の仏教文化は大きく花ひらくこととなります。小浜市・長慶院の菩薩坐像、羽賀寺の十一面観音像は平安前期の遺品です。平安後期になると、遺品の数は前代に比して大変多くなりますが、小浜市・円照寺・大日如来像のような丈六仏もみられます。また妙楽寺・千手観音像や大飯町・常禅寺・不動明王像は中央の遺品と比べてもいささかの見劣りもしない作品です。そのような優れた作品は鎌倉時代に入っても見られ、高浜町・中山寺・馬頭観音像・大飯町・青雲寺・毘沙門天像は中央作に伍する作品といえるでしょう。

(長坂)

伝統工芸に生きる

福井県には、いくつものすぐれた伝統工芸があります。いずれも福井の風土に根ざし、長い風雪に耐えて今日にいたっているものばかりです。

こうした伝統工芸品製作の高い技術は、どのようにして培われてきたのでしょうか。この番組では、越前漆器の職人さんたちに、若い頃の修業時代のことを語っていただきました。

一日中座って動かないことから始まる塗師の修業。仕事の開始は朝の7時頃、終りは夜の9時頃。5年たって年期があげるまでは、給料は一銭も出ず、ただ盆と正月にわずかな小遣いがもらえただけでした。「ボチボチ三年」といって、3年間点ばかり彫る練習をさせられた沈金^{ちんきん}の修業。親方からは手取り足取り教えてはもらえず、親方や先輩の仕事を見て盗めといわれました。一人前になっても修業が終わるわけではありません。寸暇を惜しんで写生に出かけ、また、絵画教室に通い、図柄を描くのに必要な絵の勉強が続きます。

こうした長く辛い修業に耐え、身体で覚え込んだ技術が、今、数々のすぐれた漆器を生み出しているのです。また、刷毛^{はけ}やへうさばきにみられる、熟練した無駄のない、職人さんの手の動きは、美しくさえ感じられます。

(田中)

さがしています

みなさんの身近にこんな資料はありませんか？

「こんなものが？」と思われるものが、福井県の歴史や民俗を知る大きな手がかりとなります。今一度、みなさんの身の回りをさがしてみてください。情報をおまちしています。

越前瓦

江戸から明治時代の瓦をさがしています。一見、^{がれき}瓦礫のようなものでも、今の「越前瓦」のルーツをたどる上でたいへん価値のあるものもあります。

とくに古い瓦を新しいものに葺き替える時など、次のようなものがありましたら、ご連絡ください。

- ①表面に赤・茶色の釉を塗った瓦
- ②年月日・人名・場所などの文字が刻まれている瓦
- ③葺かれた年代のわかっている屋根の瓦



新聞・雑誌

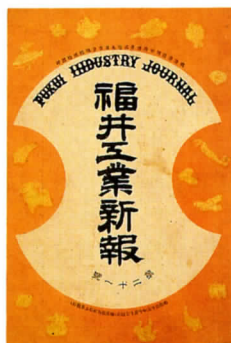
明治から昭和戦前期に発行された新聞・雑誌をさがしています。とくに、明治・大正期の新聞は、現在ほとんど残されていません。本県の歴史研究にとって、たいへん貴重な史料です。

【新聞】

『福井新聞』
『若越新聞』
『福井日報』
『北日本』
『北陸朝報』
その他

【雑誌】

『福井県工業新報』
『教育と自治』
『若越自治公論』
『福井県農会報』
『福井県織物同業組合報』
その他



仕事着

手織りや家で仕立てた仕事着などの衣類をさがしています。古い衣類はどんどん失われていますが、わたしたちの衣生活の歴史を知るうえで貴重なものです。

- ①サックリ、モジリ、モモヒキ、カルサン
マエカケ、キャハンなどの仕事着
- ②その他の衣類や手織りの反物など



ふくいミュージアム
NO.17
1990.3.20発行

編集発行 福井県立博物館
福井市大宮2丁目19-15
〒910
☎0776-22-4675(代)
印刷 出口印刷株式会社